



# 会報

平成30年度  
会報第1号

発行・編集

鹿児島県教頭会

〒 892-0836

鹿児島市錦江町 2-16  
鹿児島県公立小・中学校  
教頭会館県教頭会事務局

Tel 099-226-8268  
Fax 099-822-5580

## 会長就任のあしかり



### 鹿児島市立南中学校

### 教頭 木場 敏朗

去る五月十日に開催されました県公立小・中学校教頭会委員会において承認をいただき、会長に就任いたしました。

本年度の県公立小・中学校教頭会の会員数は七一三名、うち新任の教頭先生方が一二名となっております。新任の教頭先生方の数が近年になく多いことが、本年度の特徴です。新任の教頭先生方が多いということは、新鮮な感覚で、教頭会の運営等におきましても新しい風を吹かせてくださるのではないかと楽しみにしているところです。

県教頭会では、新しく任用された教頭先生方をはじめ、全ての教頭先生方が、安心して、自信を持って教頭としての職務を遂行できるよう、情報連携や行動連携を図るためのお手伝いができればと考えています。

さて、学習指導要領の見直しが行われ、小学校中学年に「外国語活動」、高学年に教科「外国語」が導入され

むことのない環境を作ること大切なことだと思えます。

加えて、学校現場では、子どもたちに関わる課題として、スマートフォンなどの情報端末機器等の急速な普及、規範意識の低さやコミュニケーション能力不足に起因すると思われる人間関係のトラブルの発生、生活習慣・食生活の乱れや児童虐待が疑われるような家庭の存在、特別な支援を必要とする子どもたちへの「合理的な配慮の提供」など、喫緊の対応を迫られている事案が山積している状況です。

今こそ、このような状況を真摯に受けとめ、子どもたち一人一人がきちんと教育を受け、自尊心を高め、自信を持って成長していくことのできる環境を作っていくことが大切であると思えます。

現在の社会情勢は、混沌沌としており予断を許さない厳しいものであります。そのような中で、私たち教頭は、時代の要請や国の動向を把握しながら、相互の情報交換を緊密に行いながら情報連携や行動連携を行い、意識改革と業務改善を着実に進めていく必要があります。また、そうすることが、学校運営の質を向上させ、子どもたちやその保護者、地域の皆さんの信頼に込めることにもなるのだと思えます。

さて、本県の教頭会の運営体制や研究大会への取組とその成果については、これまで先輩方が地道に積み上げてこられたものに新しい視点を加え、それを検証し、毎年実践を積み重ねてきています。

毎年行われている研究大会で提言された取組は、それぞれの学校や地域、子どもたちに還元され、本県教

育の継続的な発展に寄与しているものと確信しています。

また、鹿児島県の教頭先生方の研究の取組は、成果や課題をしっかりと論文に残し、検証や実践の積み重ねに資するものとなっていることから、九州大会や全国大会でも高く評価されているところです。

今年度の研究は、全国公立学校教頭会第十一期全国統一研究主題「豊かな人間性と創造性を育み未来を拓く学校教育」の二年目になります。全公教が示している「未来を拓く」学校教育の実現のために、県教頭会といえども、第一期初年度の研究・実践を基礎として、より具体的な実践を積み重ねていく必要があると考えています。

研究の推進に当たりましては、教頭会の研究の特色である「内省的思考による研究」及び3C(継続性・協働性、関与性)に焦点を当てた実践的研究を行う必要があります。私たちが教頭には職務遂行のための高い専門性、幅広い教育課題に対応する力、加えて、強いリーダーシップが求められています。

県教頭会は、「職能研修団体」として、そのような期待に応え、本県教育のより一層の充実振興を図っていくためにも、県内全ての教頭先生方の御理解と御協力をいただきながら、様々な教育課題の解決のために精一杯取り組んでいきたいと思えます。

そこで、今年度も次のようなことに重点を置いて教頭会の活動を進めていきたいと思えます。

一 昨年度の研究成果を今年度の研究に生かすことができるように、

これまで以上に地区の研究組織や研究体制を整える。

二 県教頭会のホームページを充実させ、九州大会や全国大会、各種研究会における有益な情報を発信し、教頭先生方へ最新の教育界の動向について情報提供していく。

三 教頭の処遇改善に向けた活動を継続的に行っていくとともに、鹿児島県教育委員会や鹿児島県連合校長協会、全国公立学校教頭会等の各種団体との連携を強化し、要請活動を続けていく。

四 昨年度の研究大会の反省をもとに、本年度の研究大会を充実したものとす。

今年度は、九州大会が長崎市で開催されます。六月に行われた九州教頭会各県代表者会・総会で、沖縄大会、宮崎大会の流れを大切にし、これまで引き続き「九州は一つ」を合言葉に、九州各県の教頭会で、本年度の研究大会(長崎大会)がより充実した大会になるよう盛り上げていくことを確認しました。

最後になりますが、学校を取り巻く様々な課題を解決していくためには、教頭先生方のこれまでの経験と建設的な意見が必要です。

県教頭会といたしましては、今後いろいろなことについて幅広く教頭先生方からの声をお寄せいただき、それを生かしながら充実した活動を進めていきたいと思えます。教頭先生方が元気に澁刺と職務に取り組まれますことと、各学校における教育活動及び本県教頭会の活動が益々充実することを祈念して就任の挨拶といたします。

## 私の勧めの一冊の本

こんな上司となら仕事したい



著者 児玉光雄（河出書房新潮）  
鹿児島市立中郡小学校

町田 実徳

ここ数年で、昭和のスターや名選手が次々と亡くなっている。中でも私の心を揺さぶったのは星野仙一氏。言わずと知れたプロ野球の熱血選手であり、行く先々の球団を優勝させた名監督である。その名実ともに人気がある星野氏は、「理想の上司」や「理想の父親」調査で必ず上位に入り、年代を問わず高い評価を得ていた。

なぜ、「理想の上司」と言われたのか。星野氏の監督時代の組織づくりを中心に分析したが、本書である。教頭職に就いてもう十年、校長の補佐という役割や職員指導等で悩むことも多かった。そんな時、本書は自分の在り方を考える上で参考となった。

星野監督は、よく闘将というイメージで語られる。確かに、感情むき出しにグラウンドで指導する姿は闘う男であった。しかし、その一方では選手やコーチ、裏方にまで細やかな気配りをしていたことも知られて

いる。また、決して人の悪口は言わなかった。選手やコーチを叱りつけるが、能力は認めて任せるところは任せる。失敗を責めず、褒めることも目一杯やる。そんな熱い心を意気に感じた選手がやる気を出し、持っていた素質や才能を成長させた。

星野氏は言う。「私は常に『一年契約』と決めている。監督に腰を据えてチーム作りに取り組ませると言う意味では、複数年契約にもそれなりの意味はあるのだろうが、現実的には一年ごとの成否を問われる。それに応えなければならぬ」と、一年一年、背水の陣をしいて揺るぎない覚悟を自らに強い一年契約こそ、本当の姿ではないかと思うのだ。」

これは、我々教職員にも言えることだ。子どもたちにも教職員にとっても、一生に一度の一年を任されているという自覚をもち、揺るぎない覚悟で職務を遂行するぞという決意を持たせる一冊である。

## 大局観自分と戦って負けない心

著者 羽生善治（KADOKAWA）  
湧水町立幸田小学校教頭

枝田 博教

著者は、中学生にしてプロ棋士になり、ついに史上初の永世七冠を達成した羽生善治氏である。この本には、将棋への考え方や心の変遷が綴られており、今後の参考になる内容が記されている。ここでは、三つ紹介したい。

一つ目は、将棋界における大局観だ。将棋は「読み」と「大局観」のゲームであり、若いころの羽生さんは読みに重点を置いていた。しかし、難局に面した場合には、読みだけでは対応できず、長考して一つの局面を掘り下げてきたことの積み重ねが大局観として培われ、乗り切ることができたと述べている。

管理職は、児童・生徒や職員、地域の実態を見て、具体的な手順を考えるだけでなく、今の学校を取り巻く状況はどうか、今後どうするべきかをじっくり考え判断することが重要な責務であると言える。

二つ目は、負けは変化のきっかけになることだ。羽生

さんは、新しい戦法に対応できず負け続けた自分を振り返り、新たなスタイルを構築することに気づき復活を果たした。私たちが指導に悩んだときは、今までのやり方に固執することなく、新たな指導を積極的に取り入れていくべきだと気づかされる。

三つ目は、将棋界では、師匠に教えてもらいう前に自分で考えることが常であるということだ。そして、師匠が弟子に改善点を言うことはほとんどなく、教えてもらう前に自分で考える習慣を身につけさせている。

子どもが考える時間を十分に確保していない学校現場においては、改善すべき点である。

今の学校現場では、「主体的・対話的で深い学び」が実現できる学校づくりが求められている。私は、羽生さんの考えを学校現場に生かして、学校長の補佐として大局観に立った学校経営に尽力していきたい。

## 自由投稿

亡師亡友の碑



中種子町立星原小学校

川南 泰志

教頭二年目となった私は、環境整備は自分の務めと、草払いにも精を出している。特に、記念碑等の周りはいつも整然としておきたい。実は、少し苦しい思ひ出があるからだ。

六年前になる。私は、統廃合で閉校が決まったある極小規模の学校に勤めていた。八月のある日、見かけない老夫婦が訪ねてきた。「大阪に出ており、六十年ぶりに里帰りしました。閉校になると聞き、訪ねてきました。学校をちよっと見せてもらえないでしょうか。」どうぞと促し自由に見てもらった。最後に、二人は「亡師亡友の碑」の前に立ち、はあっと大きなため息をついて深々と頭を下げた。長い時間が経ち、ようやく頭を上げた二人の目には涙があった。石碑には蔦が絡み、何年も放っておかれた枯葉が腐葉土となって積もり、その隙間から夏草が茂っている。まさに藪。六十年の歲月を経て帰ったが、変わり果てた姿に涙を流して頭を下げる老夫婦の姿が私の胸を刺した。

学校は、現在通う児童や職員だけのものではなく、巣立った何千何百の卒業生の心の拠り所でもある。学生時代の貴重な青春や大切な人を戦時下で奪われた世代もいる。そういう卒業生にとって、あの石碑は、とても大切な心の拠り所だったのだ。

いま現在の姿だけを見るのではなく、これまでの学校の歴史に思いを馳せ、その一部を守る者としての自覚をもちたい。現任校では、石碑周りに草が茂らぬよう気をつけている。

## 随想 当日パン

鹿屋市立鹿屋東中学校

高瀬 茂

私の実家は、曾於郡大崎町にあり、十数年前まで菓子・給食パンの製造業を営んでいました。

小学三年生のある日の給食時間、一人のクラスメートが「パンが堅い。」と言いました。グニャッと握りつぶしました。無残につぶされたパンを見て腹を立てた私は帰宅して母にそのことを訴えました。そして、その後間もなく父の決断で「当日パン」を納めるようになったのです。

「当日パン」とは文字通り当日食べるパンをその日の朝に焼いたものです。焼きたてのパンはふわふわで、みんな喜んで残さずに食べるようになり、私は学校での居心地がたいそうよくなりました。このことを覚えています。町内すべての学校を「当日パン」にした両親は、毎朝今までより三時間早く起きるようになりました。

それでも「当日パン」に踏み切ったのは、「堅いパン」を

子どもたちに食べさせられないというパン職人としての矜持、子どもの笑顔が見たいという大人への優しさ、そして何より我が子への愛情だったのではないかと思います。仕事に関して多くを語らなかつた父の本意はわかりませんが、当時の父の年を越え、毎日子どもたちに携わる仕事をしている今、あの頃の父の背中を思い出し、与えられた場所で精一杯職務を全うしようと思っています。

## 新任教頭雑感 校務を整理する！

鹿児島市立長田中学校

下小野田 秀樹

4月に、鹿児島市立長田中学校へ赴任し、早くも数ヶ月がすぎました。本校は、東に雄大な桜島・錦江湾を望み、背後に城山をひかえた史跡に富む景勝の地、史跡の街にあります。鹿児島市の中心部に有りながら、校門付近やグラウンドの周りは緑の木々に覆われており、「長田の森」と呼ばれる場所もあります。

私が初めて訪れたときは、部活動の生徒が落ち葉を掃き清めている最中で、車から降りた私に、最高の笑顔であいさつしてくれました。

よし、この生徒たちのために頑張るぞ！と思っただけ切ったのも束の間で、怒濤のように押し寄せてくる調査物。

やらねばならないことを幾つも抱えつつ、余裕のないまま過ごした日々もありました。私がそうであっても、生徒たちは、相変わらず朝作業をして場を清め、しっかりとしたあいさつを交わし、静と動をしっかりとわき

まえ、すくすくと日々成長しています。

一方、PTAの活動や地域の行事を重ねるごとに、私の輪も広がりとつあり、頼もしい地域のリーダーの方々や、仕事や子育てをしながら、子どもや地域のために活動する保護者に出会い、エネルギーと知恵を分け与えてもらっています。学校の教育活動が、地域・保護者と一体となつて進められていることも実感しています。

まだ微力なのですが、学校教育目標にある「自らの可能性を発揮する生徒の育成」に今後も教頭として力を注ぎたいと思います。